

# 村野藤吾記念会

## Togo Murano Committee

### 第15回村野藤吾賞

作品 アルテピアッツァ美唄 Arte Piazza Bibai / 作者 安田 侃

選考理由 村野藤吾賞選考委員 池原義郎

美唄の語源はアイヌ語でピバ・オ・イ（カラス貝の・たくさんいる・ところ）に由来すると聞く。石狩川が氾濫する流域の沼々にはカラス貝が多かった。この呼び名の語源は透明な響きを耳朶に残す。

近代になり石炭鉱脈が発見されて、明治末期から石炭のまちとして大躍進し、戦前、戦中には基幹エネルギーとしての重要な役割を担い、戦後はわが国復興の重要な一角を占めて、美唄市は9万余の人口を擁したこともあった。

石炭の時代が終わると、市は衰退に向かって急落し、炭鉱も鉄道もその機能を失い、人口の三分の二がこの地を離れた。半世紀余にわたり、地に潜む黒いダイヤを掘り尽くしたエネルギー産業が美唄の地に残したものは、生命感を脱色した灰色の廃墟であった。そして時の流れのなかで、風化したまちのもろもろの生活施設のほとんどは朽ちるままとなり、残るものは2基の巨大な豎坑巻き上げ機とコンクリートの頑強な鉱山施設の架構、炭鉱夫の子弟が通った栄小学校だけであった。

美唄に生まれ育った安田侃氏は、白大理石の石切山で知られる北イタリアのカララに近いピエトラサンタにアトリエを構え、創作活動を続けている。そしてこの10年ほどの間に、ミラノのヴィットリオ・エマヌエーレⅡ世通りでの街路個展、イギリス・ヨークシャー・スカルプチャーパークでの野外個展、ピエトラサンタ市街個展、フィレンツェの主要広場と街路での個展等、都市空間との、あるいは建築空間との共演個展を次つぎと行い、国際的な巨匠としての名声を不動のものとする彫刻家である。

氏は、市の意志を受けて、10年前より美唄の廃校となった旧栄小学校の広い校地と、そこに建つ隙間だらけの木造校舎を、まちの有志の力を借りながら芸術文化交流施設“アルテピアッツァ美唄”としての再生に情熱を傾けている。

氏は語る。「この栄小学校が残った大きな理由のひとつは、古い隙間だらけの、寒く凍える校舎に頑張って通い続けた幼稚園児がいたおかげだと思う。通園する幼児もわずかで、閉園寸前だった。この子供たちがアルテピアッツァ美唄のメイキングにとって大きな存在となった。一面真っ白な雪に覆われた山の中の幼稚園に、どんな吹雪の日も色とりどりのアノラックを着て元気に通ってくる子供たちの姿は、何かを訴えていた。この子供たちが喜ぶ広場にしようという思いが、アルテピアッツァ美唄創造の火種となった」と。

残されていた体育館と隙間だらけの教室棟に、最小限の手を加え（いや、余計なものを引っ剥がし取り除いて）氏の彫刻が配置され、ときには子供たちのナイーブな絵も参画し共演する、暖かい生き生きとした生命感のある空間とした。講堂では展示もそのままに、講演会が行なわれコンサートが心を唄う。荒廃していた校庭に緑が参加しはじめ、彫刻が配されて美しく柔らかい芸術ピアッツァとなった。

素朴であるが故に、風も季節も時の流れも豊かな生命感を呼び、一度死滅した大地に新しく芽吹くピアッツァは、人びとに開放された。

いま、私たちが生活しているこの時代は、灰色に硬化しつつあるようにも見える。そのときに、安田侃氏が10年かけて苦闘し続けた結果が姿を見せてくれた。それは私たち建築にたずさわる者にはもちろん、多くの人びとの心に深く柔らかい感銘を与える。

ここを訪れた人たちはその感慨を記す。

「忘れかけていたこの音、白い、この色。私の中にも故郷・美唄が原点として残っています」

## 村野藤吾記念会 Togo Murano Committee

---

「ひとつひとつ手に触れて、それぞれの心を胸に痛く感じ、涙があふれた。沈む心が浮き上がり、安らかな気持ちで帰ります」

「彫刻とたわむれている子どもたちがいて、はじめて足りないものが補われる気がした。丸い池の中心で手を広げて立ってみて、空間と一体になった気がした」

「毎年帰省したときにはここにきています。なんともいえない不思議なエネルギーが“人間の本能”をくすぐるようです。いいな、この感じ！」

等々。

心の視座に立つこの再生のプロジェクトは人びとに感銘深い共感を与え、そこに時代へのひとつの重要な示唆があるように思う。